令和２年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　金賞

戦争の実相を後世に語り継ぐ若者たち　（藤井 健太郎）

［おすすめしたい本］弓狩匡純

『平和のバトン　広島の高校生たちが描いた８月６日の記憶』

３年前、私は広島の平和記念式典に出席した。その日は、原爆が投下されたときと同じ、抜けるような青空と強い日差しが照りつけていた。静かに開式を待つ間、被爆者と思しき男性が、「広島駅付近でバスに乗っていて、原爆がさく裂した。凄まじい光と爆音、熱風に襲われた。」と当時を振り返っていた。聞こえてきた話を自分なりに想像してみたが、戦争を知らない者には、すべてを理解することは難しかった。戦後７５年が経ち、戦争の記憶を継承することは、社会的な課題となっている。そうした中、広島市立基町高校創造表現コースの生徒たちが、被爆者から当時の様子を聞き取り、絵画に残すプロジェクトに取り組む。本書は、被爆者の証言とともに、それを描く高校生の姿を追った作品である。

このプロジェクトは、今年で１３年目となる。被爆者の証言をもとに、生徒たちは一年をかけて１枚の絵を仕上げる。勝手な想像ではなく、被爆者が見た光景を正確に描き切っていく。そのため、何度も被爆者の話に耳を傾け、修正を加える。「自宅の前で黒い雨に遭う自分」という作品には、廃墟の中、白いブラウスを着た少女が立ち尽くす姿が描かれる。その表情からは、原爆の衝撃の大きさと得体の知れない恐怖感が伝わる。どの絵画も見る者に、戦争の実相を強く訴えかけてくる。それは、生徒たちが被爆者の心情に寄り添い、真摯に制作に打ち込んだからにほかならない。ある被爆者は、これまで家族にさえ話してこなかった体験を、孫娘である高校生に初めて語ったという。まさに、本書のタイトルである「平和のバトン」が引き継がれたのである。

私は戦争と向き合い、ひたむきに絵画の制作に打ち込む高校生の姿を多くの人に知ってほしい。そして、戦争の実相を知り、平和の尊さについて考えてほしいと願う。高校生が引き継ぐ「平和のバトン」には、よりよい未来を築くヒントが隠されている。

令和２年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　銀賞

命とは…？を親子で考えた一冊　（西村 みどり）

［おすすめしたい本］坂本義喜（原案）、内田美智子（作）
『いのちをいただく　みいちゃんがお肉になる日』

「栄人（えいと）…泣いているの？涙…。」
この本を初めて息子と一緒に読み終えた時、当時小学校三年生だった息子が泣いていました。息子は、悲しい気持ちと色々な気持ちがごちゃ混ぜになったと言っていました。

この本に初めて出会ったのは、息子の小学校からの回覧図書でした。食肉解体作業員として働く、坂本義喜さんのお話です。

坂本さんが働く食肉センターに、ある日、みいちゃんという牛とみいちゃんを飼っていた女の子と女の子の家族がやってきます。牛のみいちゃんは女の子と一緒に育ったので、食肉にはせず、ずっと家に置いておいてもらう予定でした。しかし、みいちゃんを売らないと生活が出来なくなるという事態になり、女の子のおじいちゃんが、やむを得ずみいちゃんを食肉にすることに決めたからです。牛のみいちゃんと女の子はお互いにとても強い絆で結ばれていたので、みいちゃんは命が解かれる時に大粒の涙を流したのです。

息子と私は、この本を読むまでは、お店や家でお肉を見ても何も思わずに、ただ「美味しいな。」と思って食べていましたが、この『いのちをいただく』を読んでからは、お肉を見ると感謝の気持ちでいっぱいになるようになりました。また、お肉を見ると、この牛や豚にもみいちゃんと女の子のような目には見えない物語があるのかも知れないと思うようになりました。

私達は生きていていますが、生きていられるのは、あらゆる命をいただいているから生きることが出来ているのだと改めて気付きました。

沢山の方に食肉解体作業員の坂本さんの仕事や、牛のみいちゃん、みいちゃんが大好きだった女の子、そして、スーパーに並んでいる食肉に目には見えない物語があるという事を知ってもらいたいです。

是非親子で読んでいただきたい一冊です。

令和２年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　銅賞

障害者のなくし方　（加藤 香世）

［おすすめしたい本］海老原宏美

『わたしが障害者じゃなくなる日

難病で動けなくてもふつうに生きられる世の中のつくりかた』

「わたしに障害があるのは、あなたのせいなのです。そう言ったら、おどろきますか？」

難病をかかえ車椅子、人工呼吸器とともに生きる著者から問われたら、、、驚きます。だって、なんて挑戦的な問いかけでしょう。

障害は個性、多様性の社会、といわれるけれど、障害を持って生まれることとは？社会の中で暮らすとは？生きる権利とは？平等とは？本人を前にして言葉につまる質問です。

社会が健常者中心に健常者目線で作られてきたことが結果として障害物だらけの社会で障害者をはじめ弱者に生きづらさや後ろめたさ、我慢と努力を押し付けてきたのです。ましてや尊厳死の議論は生きる、という根幹さえ揺るがすもの。著者が言う、「わたしに障害があるのは、あなたのせいなのです」は、このことだったのです。著者は続けます。

めざすのは、健常者目線の世界に障害者や弱者が合わせるのではなく、社会を障害者や弱者にあわせること（合理的配慮と公平さ）。

もつべきは、かわいそうだから助けてあげる、という助ける側の感情に左右されて助けられる、という考えから、人が人として普通に生きる権利として助けられるのだ、それは尊重される、という考え（人権）。

おかしいですか？助けられる側が権利を主張したらわがままですか？

本書は私たちが無意識にもつ、健常者と障害者、という垣根を、思い込みによる固定観念を一つ一つ取り外し変えていきます。著者が生まれ、育ち、暮らし、考え、行動する中で、人のせいにせず、本気で生き、困った時は困った、と頼り、差別に声を上げてきた彼女の声です。少しばかりはいい人だと、自己満足で生きてきた私には、目から鱗、１８０度、考えがひっくり返りました。誰もが明日も生きたい、と思えるような生きる権利が守られ尊重された社会は、障害があるなしにかかわらず誰もが暮らしやすい社会となるはずです。

令和２年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

「へぇー」と「ああ」から学ぶことを考える（岩井 淳子）

［おすすめしたい本］盛口満

『めんそーれ！化学　おばあと学んだ理科授業』

学校の「学」という文字は、「教える者が学ぶ者を向上させる交わりの場である建物」という意味を持つそうだ。

沖縄県那覇市に「珊瑚舎スコーレ」という民間の運営する学校がある。ここの夜間部で学ぶ者は地元沖縄出身の、それもほとんどが六十代以上の女性。戦中戦後期、混乱と貧困のため学校に通うことができずに、義務教育未終了で今に至った人たち（特に女性）が多かったからだという。

これは夜間部で学ぶ生徒たちの、一年間の授業記録をもとに書かれた本なのだが、教える者が学ぶ者に、学ぶ者が教える者にと、立場を超えた「学び」の風景が、随所に記される。例えばこんな風に…

「金属はたたくと延びると授業の中で説明すると、ああ、昔コンビーフの金具をたたいて針にしてというお話がでてくるわけです。」

くらしの中で体験したさまざまな経験知、本や学校から得たのではない知識がポンポンと飛び出すのである。

一度も理科を学んだことがない生徒たちに対して体験に結びつく授業を行うことで、たくさんの「ああ…」を引き出し、そして著者自身も教えられていく。

現在は大学で小学校の教員を目指す学生たちへ、「理科とはくらしに結びついていてその理由を明確にしたり、法則性と繋げたりするものではないか。結びつくものがないから今の小中学生徒は、『ああ』ではなく『へぇー』という。みんなも先生になったら、『ああ』の授業ができたらいいな」と、夜間部での体験をもとに指導を行っているそうだ。

「なぜ学ぶのか？」の問いに、「学ぶことは新しい自分に会えるから」「もっと学びたい」と答えを返すおばあたち。このおばあたちに近い年齢の自分は、果たしてどれだけの「ああ」を言えて、伝えていけるだろうか。

全ページ学ぶということの意味と、化学の楽しさを感じられる、おすすめの一冊です。

令和２年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

差別について考えよう　（藤田 正代）

［おすすめしたい本］島崎藤村
『破戒』

今、世界には様々な差別が溢れている。アメリカの黒人差別を言うまでもなく、日本国内にも、性差別、民族差別、高齢者・障害者差別、災害被害者（東日本大震災による福島県人）差別と枚挙に暇がない。特に昨今コロナウイルスの感染者や医療従事者の家族に対する差別的仕打ちには慄然とさせられる。怒りさえ湧いてくる。

そんな時ふと「この感情をずっと昔に感じたことがあった」と思った。それは中学校の図書室で１冊の本を手にとったときだった。

明治３９年、島崎藤村３４歳の時出版された『破戒』である。舞台は長野県の北部飯山市近辺の貧しい農村地帯である。信州の冬の寒さは厳しい。まして北信は雪も多く、人々は長い冬を雪に閉ざされて過ごす。藤村はそんな北信の自然の美しい描写にからめつつ、丑松の苦悩をあぶり出す。

主人公瀬川丑松は穢多であった。江戸時代の身分制度で士農工商のさらに下に置かれ、非人、部落民などとも呼ばれた。明治４年に身分制度は廃止されたが差別は根強く残り今に続いている。

まわりの部落出身者が酷い迫害を受けているのを見た丑松は、自分の出身がばれるのを非常に恐れた。小学校の教員である彼は、ばれれば教職を追われ、下宿を追われ、友人も去るのではと恐れつつ、出自を顕かにしたい思いと「隠せ」と言った父の戒めとに狂うばかりに懊悩するのである。そんな日々を送るうちに丑松は「我は穢多なり」と堂々と宣言した思想家に多大な影響を受け、ますます告白しなければという思いが強くなる。いよいよ丑松は受け持ちの子等の前で告白し、隠していたことを謝罪した。そのあと、子供らは、友人は、同僚は、そして丑松はどうしたか。是非読んで欲しい。そして一緒に考えましょう。どうして百年余前と同じことが起きているか、どうしたら差別をなくすことが出来るのか話し合いましょう、一緒に。

令和２年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

「つまづいたって いいじゃないか にんげんだもの」（加藤 和保）

［おすすめしたい本］相田みつを
『にんげんだもの』

新型コロナで外出自粛、図書館も閉館。家の本を読むしかなかったが、かつて感銘を受けた本を再読するのも、結構愉しかった。

イチオシのお薦めが「にんげんだもの」。初版が百万部以上も売れ、著者の没後も人気が高い秘密が少し理解できた気がする。

もう３０年も前に購入し、授業の素材にも学級通信の記事にも引用させてもらった本。概ね生徒にも保護者にも好評だった。

まず独特の書体に魅かれ、命の尊さや出逢いの大切さを語りかける言葉に癒される。ある生徒は「つまづいたっていいじゃないか　にんげんだもの」を部屋に貼っていたそうだ。失敗して落ち込んでいてもほっこりできる、説教くさくないのもいい、と話してくれた。

「その時の出逢いが　人生を根底から変えることがある　よき出逢いを」が好きだという教師も大勢いた。つい「もっと頑張れ」、「まだできるはずだ」と駆り立て、競わせがちな教室を、教師と生徒、生徒同士が出逢う一期一会の場にしたいと願う教師たちだった。濃密な時間を共有できた喜びは、生きていくエネルギーになった、と今でも確信している。

さて久しぶりに読み返して、時代の変化を感じざるを得なかった。今や掌のスマホで見つけた見ず知らずの人に、ＳＮＳを使って攻撃する時代。いとも簡単に、しかも匿名で。

法で規制しても根本的な解決にはならないだろう。格差が広がる以上、努力が報われずにつまづく人は増え、誰かのせいにして楽になりたい思いが強くなるのは当然だ。

それでも人間を信じよう、たとえ弱くても少しの勇気を出して…、「にんげんだもの」は自然に背中を押してくれる気がする。

今だからこそ、この本をもっともっと多くの人、特に若者に読んで欲しい。著者の願いがじんわり心に響くだろう。

「良書は心と体のビタミン剤」という。イライラする時、頭にきた時、声に出して読めば肩の力が抜けて楽になる。お薦めしたい！

令和２年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

「１６歳の語り部」からのメッセージ　（田中 咲子）

［おすすめしたい本］雁部那由多・津田穂乃果・相澤朱音（語り部）、佐藤敏郎（案内役）
『１６歳の語り部』

９年前、私がテレビで目にした東日本大震災の惨状を、当時小学５年生の彼らはその目で見ていました。彼らは、宮城県で被災し、やがて被災体験を人々に伝える「語り部」になります。

授業中、今まで経験した事のない揺れに、不謹慎にもワクワクした気持ちや、津波から逃れようと必死で手を伸ばしたおじさんに、背を向けて走った罪悪感を、率直に打ち明けています。また、当時報道されなかった、大人が子供を薙ぎ倒し、救援物資を奪い合う配給の様子も、包み隠さず語っています。私がテレビで知った震災は、苦しくても立ち向かう美しいものだったけれど、彼らの言葉がもっと悲惨で現実的なものへと変えました。

震災当初、彼らは無力感でいっぱいでした。小学５年生には重すぎる現実は、語る事すら許されていませんでした。しかし、人との出会いと、成長を経て、彼らが語り部になっていく姿には、辛い事や迷いがあっても、それを内包して生きていく強さがありました。

「僕たちが伝えることで助かる命があるのなら、そっちに賭けたいんです。」

語り部の活動をしていて、辛くはないのかという質問に、雁部那由多君は、いつも迷わずそう答えています。

９年経った今でも、私達が知っているのは、東日本大震災のほんの一部に過ぎないのかもしれません。あの日、宮城県の一つの小学校でありふれた日常が壊されました。失ってしまった彼らだからこそ、その尊さを誰より知っています。

強く静かに語りかけてくる「１６歳の語り部」からのメッセージに、耳を傾けてみて下さい。目の前にある日常を守る為に、出来る事は何かをきっと考えてみたくなるはずです。

令和２年度　清流の国ぎふ・おすすめの１冊コンクール

紹介文部門　奨励賞

ガネーシャが君を変える！（小林 奏）

［おすすめしたい本］水野敬也
『夢をかなえるゾウ』

「タバコ、吸うてもええ？」

この一言から、どんな人の姿が想像できましたか？実はこれ、物語に登場する象の姿をした神様、ガネーシャのセリフです。彼は、インドの神様なのに関西弁を話し、おやじギャグが大好きで、ぽっこりした大きなおなかをしていて…そんなおじさんのような神様です。物語の中で、夢を叶えるための試練として、まず、主人公「僕」に靴磨きをさせます。私も初めて読んだ時は、なんていい加減な神様なのだろうと思いました。しかし、ガネーシャは、僕を成功へ導く、凄い力を持っていたのでした。

ガネーシャは、全く無意味に思われるような試練を通して、新しい自分になるために必要なことを私達に教えてくれています。どうしても、ガネーシャの面白いキャラクターに目が行きがちなのですが、たまに彼が真面目な話をする時、そこには、心にグサッと刺さるような深いメッセージが込められています。私は、面白さと真剣さを両方持ち合わせたこの文章に、とてつもないパワーを感じました。ガネーシャの名言は、ビジネス書に出てきそうなほど説得力のあるものばかりです。それを、普段はいい加減でチャーミングな彼が言うことで、読者の心に響いてくるのだと思います。また、普通の会社員である僕の、ごく普通の生活の中でガネーシャとのやり取りが繰り広げられることで、読者自身の事のような感覚で読むことができます。ストーリーの面白さを楽しみながらも、今後の人生のヒントが見つかる、素敵な一冊です。一度読み始めると、ガネーシャ節が炸裂する、唯一無二の世界観に、あなたも引き込まれていくことでしょう。

新しい自分になりたい、夢を叶えたい、でもどうしたら良いのか分からない…と悩んでいるそこのあなた！ガネーシャがきっと、その手助けをしてくれますよ。

「ほんならワシについてくるか？」